

日本語

3



日 本 語

Ⅲ

東京外国語大学附属
日 本 語 学 校

1976

目 次

	ページ
1 文明の国スウェーデン	1
2 わが大学を語る	20
3 ことばの意味	25
4 身体に関する言い回し	35
5 テレビ・ラジオ時代の新聞の役目	43
6 機械との共存	56
7 走れメロス	65
8 なんでも見てやろう	90
9 思想の移植性について	100
10 風立ちぬ	106
11 科学と人間の福祉	122
12 現代都市の生活構造	138

1 文明の国スウェーデン

なかねちえ
中 根 千 枝

20世紀後半の現在、世界は、生活水準の向上を目ざして、科学の発達と相まって、一路機械化への道を、そして福祉国家への道を上昇している。こうした現象はいったい、人間にどんな影響をもたらすであろうか。

わたしがストックホルムに着いた時、いろいろな国際会議が重なって、ホテルは超満員で、部屋がとれなかった。ちょうど親切な友だちが、その叔母さんが留守だからというので、一人用のモダンなフラット（アパート式住宅）を貸してくれ、わたしは2週間ばかりそこに滞在した。なにしろ、インドの辺境生活から出て来たばかりの時だったので、初めはそのモダンなフラット生活を大いに楽しんだ。

そのフラットはストックホルムの西方の閑静な美しい住宅街にあった。下にデンマーク料理の小さなしゃれたレストランがあって、その横の総ガラスのドアを押して、スマートなかわいい自動式のリフトで6階にのぼる。一分のすきもない、きれいなドアのかぎをあけると、左側に玄関に必要なちょっとした家具があり、真ん中は奥

を覚え始めた。ある日、久しぶりにご飯をたこうと思って、食糧品屋に行って米を求めると、1キロほど入った角砂糖の箱のようなもので、真ん中がセロファンで中身のお米がわかるようになっている箱を渡された。何だかお米という感じがしないと思いながら、帰っておなべにあけてみると、どうも機械かなんかですっかり洗ってあるらしく、一粒一粒がピカピカ光って、まるで薬かなんかのようだ。かしいけれど、水はほとんど透明で、いったい、味があるのかしらと思う。久しぶりに食べるご飯だったので、おいしいような気でしたが、あのピカピカの薬のような粒を連想して、化学薬品のようなあじけなさが出てきた。お米ばかりではない。野菜もそれはそれはきれいに、土の気など薬にしたくともないようになっていて、またそれを上等の紙で包んでくれるから、土に生えた植物という感じがなくなってしまふ。それをまた、ひどく非人間的なフラットで、クッキングして、窓からコンクリートのビルディングを見ながらたべるのだから、だんだんやりきれなくなってきた。わたしはインドのにぎやかなバザールで、砂やもみがらがまじっているような米を、路傍で農民から買う喜びをしみじみ懐かしく思ったり、土の香のする日本の八百屋で買うほうれん草やじゃがいもがひどく恋しくなっ

たりした。

インドや日本では、生活水準は低いけれど、人々は決して孤独ではない。機械より人間が氾濫^{はんらん}し、人間にとって全く自然な土のにおいがする。ヨーロッパに着いて以来、私はひどく土を恋しく思った。都会のヨーロッパ人は石やコンクリートの家に住み、道は石畳かアスファルト。都会にいと、この地球に土というものがどこへ行ってしまったのかと思う。くつなど1週間みがかなくても少しも汚れないことは、不精なわたしにはうれしいけれど、土のにおいが全然ないということは、農耕文化を基盤とした日本人にはひどく寂しい感じがする。日本にいたときは、東京郊外のどろんこの道を歩かされてぶつぶつ言ったものだ。インドはこれまたひどく、日本より何倍も土くさい所だった。台所の床は土だし、食器をみがくにも土を使う。長距離列車に乗ると、よく女の人が一塊の土を持って乗る。自分のコップやお弁当箱を洗うためである。だからあらゆる所で土を見る。それに比べてヨーロッパは肉とバター・ミルクのにおいだ。牧畜文化という、わたしたちと異なる文化の基盤を持っていることをしみじみ感ずる。ところで、コンクリートの中で、機械のにおいに囲まれたような生活で、彼らは満足しているのだろうか。否であ

孤 不 精 耕 盤 塊 畜 異 困

る。ストックホルムの人々は、ウィークエンドには必ず車で郊外に出、機械文明からできるだけ遠ざかろうとする。ストックホルムから1、2時間の郊外には、ちょうど東京郊外の建て売り小住宅のよ
うなものがずっと並んでいる。1軒が2、3部屋から成り、ひどく
簡素なベッドと椅子・テーブル・台所用品・農具があるだけ。そして
みな20坪ほどの庭があり、そこに木を植えたり、草花や野菜を
栽培して、ウィークエンドを過ごすのである。知り合いになった金
髪の、(1)バグマンそっくりの顔をした婦人はこう説明した。

「私たちはもちろん水道なんかなくて、水をくみに行く所が遠く
で、できるだけ不便な所を選ぶのです。すべてが不便にできていて、
わたしたちの労働を必要とすればするほど、わたしたちは大喜びな
の。ガスもなくて、まきを集めてお料理できれば理想的なの。」

不便で簡素な田園生活へのあこがれは、ちょうど日本人の自動的
に電化された高級アパートに住みたいというあこがれに匹敵する。
わたしはここではじめて、わたしがストックホルムでした未開民族
についての講演に彼女らがいかに熱狂したかが納得できたような気
がする。彼女らにとってどんなにこのウィークエンドが重要なもの
であるかは、わたしたちの想像以上である。これがなければとても

生きていけないほど、重要な1週間のスケジュールになっている。これは全く習慣になっていて、わたしの帰国後、東京を訪れたスウェーデンの学者が、ちょうど土曜の夜に着いて、開口一番、わたしに言った言葉は、「きょうは郊外にいらっしゃるはずでしょう。郊外にいらっしゃる大切なあなたのウイークエンドを取りあげてしまって、心からお気の毒に思います。」わたしはおなかの中で笑いが止まらなかった。毎日どろんこの道のある郊外で、彼らのウイークエンドに使うような家に住んでいるわたしたちの大都会東京の生活は、ストックホルムから来た彼には想像もできなかったのである。

わたしの研究に奨学金を出してくれたE・W財団のプレジデントE女史は、ある日わたしにストックホルムの託児所と養老院を見学していらっしゃいといって、案内の婦人をつけてくれた。この二つの施設は社会福祉国家として有名なスウェーデンの誇るべきものである。

託児所はストックホルムの郊外の閑静な住宅街にあって、建物は庭木のある芝生シバの庭を持った、ちょっとした普通の住宅の造りであった。案内されて中に入ると、10室ほどあって、それぞれ何歳の部屋というようにきまっていて、たとえば6歳の部屋には、6歳の

児童に最も適した絵本・おもちゃ・机・椅子をはじめ、6歳の児童に最適のあたたかい壁の色、じゅうたん・カーテンにまで細心の考慮が払われ、じゅうぶん児童教育のトレーニングを受けた若い女性が、保母として3人ぐらいの児童を専門に受け持っている。一部屋にはたいてい、一人か二人の子供がいた。

現在、ストックホルムの既婚婦人の70パーセントが職を持つといわれているほど、既婚婦人の就職率が高いため、このような託児所の施設がたくさんできている。職を持つ母は、毎日出勤前に車で子供をここに連れて来、一日、帰宅の時までここに預かってもらうのである。

この理想的に完備した託児所の一日の預り料をきいて、わたしは全く驚いてしまった。それは、わたしが当時滞在していた、ストックホルムの駅前のホテル代の二倍という高額だったのである。案内の美しい若い保母さんは、7歳の部屋で一人で何かおもちゃをいじっていた子供を指して、

「この子はもう7年も、ここで暮らしているのですよ。」

とわたしに言った。その時ふとふりかえった金髪の少年のひとみがなんと寂しそうだったことか。わたしはその人懐っこそうな、そし

て寂しい憂いの色さえ見える，まつげの長い水色のひとみに，氷の平原にいるような孤独の訴えを見て，胸をつきさされるようだった。この子は，とても自分では言えないけれども，どんなぼろの汚れた服を着ていてもいいから，母のそばにいたいのであろう。幼い子にとって母の愛がどんなに恋しいものか。どんなに文明が進み，社会保障が行き届き，どんなに物質的に恵まれても，母の愛をつくり出すことはできないのである。日本の就職を望む既婚婦人は口癖のように言う，「よい託児所さえあれば。」と。託児所というものに期待するのもけっこうだけれども，あの寂しい子供のひとみに耐えられる女性は，母は，日本にいったい何人いることだろう。貧しい未亡人や，一家の生計を負わなければならない婦人にとってはもちろん理想的な施設だけれども，家にいることが経済的に可能なのに就職のためにこうした施設を利用する母たちは，よくよく考える必要があるのではなからうか。

スウェーデンはフィンランドに次いで，早く女性の投票権を獲得した，女権運動の盛んな国である。女権運動にその半生を過ごしたある銀髪の老婦人はわたしに語った。

「スウェーデンでは，わたしたちの運動によって，ずいぶん婦人

の地位が上がり、多くの女性が社会に進出しましたが、まだ給料はどうしても女性の方が低いのです。女性は産前産後の休暇をとるため、労働力が劣るから、給料も男子と同等にできないと言うのです。そこでわたしたちが今提出しようと考えている案は、妻が出産のため1か月休暇をとる場合には、必ず夫も1か月休むことにするのです。もちろん、出産自体は女の仕事ですが、出産に関するいろいろな仕事は夫がすべきです。たとえばおむつの取り替えとか、ミルクを飲ませたり、その他いろいろの家事をすべきなのです。そのようにすれば、夫も妻も出産に当たって同じ日数休むことになり、男女の絶対労働量を等しくすることができます。そして賃金平等の基本線が出て、はじめて男女平等となることができるのです。」と。結局、男女同権、男女平等をおし進めていくということになるわけだ。わたしには彼女の意見は少し行き過ぎのような気がした。

同じスウェーデン人でも、ストックホルム大学の社会学のある先生は、全く違った考え方をしていた。家族問題が専門であるその先生は、静かな口調でわたしに語った。

「ぼくは、スウェーデンの女がめざましい社会的な進出をして、はたして何を得たかということになると、疑問ですね。むしろ得た

ものより失ったもののほうがはるかに多いのではないだろうか。たしかに女性の生活水準は上がったでしょうが、彼女らが月給で得たものは、おしゃれのための服飾品とか、より多くの娯楽がおもなものではないでしょうか。そうしたものは、彼女たちの欲望を満足させていくには、大いに役立ったでしょうが、それによって女性の魅力は増すどころか、かえって減ったと言わなければならないでしょう。彼女たちの物質的な欲望の満足のために、その子供や家族はどれだけ犠牲になったことでしょう。女性としての本質を失ったこうしたスウェーデンの女性たちが、どんなにスマートによりよい服を着ていても、もはやぼくたちにとってどれだけの魅力があるでしょうか。」

男性側からの鋭い批判である。

スウェーデンでは、あまり豊かで平和なために、すべて少しアブノーマルだ。さきの女権運動の婦人及びストックホルム大学の教授によって代表された意見は、現代直面しつつある女性問題の両極を示しているが、ひるがえってスウェーデンの男性を見ると、少し男性的な魅力に乏しいのではないかと思われる。150年も戦争をしないで、国が豊かで社会保障が行き届くと、男性というものはかく

も女性的になってしまうのだろうか。あのかつてのバイキング時代の男性の魅力は、どこへ行ってしまったのだろうか。スウェーデンの男性はひどく優しく、その上困ったことに情熱がないようだ。ラテン系のイタリアやフランスの男性は優しいけれど、その情熱の強さに男性的なものを感じる。スウェーデンの男性はなんだか透きとおっているみたいで、あれでは女性が産前産後休ませて、おむつの取り替えをさせよと言いだすのも、なんだかわかるような気がする。

わたしはスウェーデンに行ったはじめのころは、なんて女性がのびのびとしている天国だろうと思ったのだが、1か月くらいたつと、イギリスや日本のように男性はいばっていてもいいから、男性的であるほうが、女性にとって案外いいのかもしれないと考えるようになった。弱き男性を支配する強き女性の社会なんて、わたしは張り合いがなくなってやりきれないような気がする。わたしは古い日本の女性なのだろうか。それからフランスやイタリアに行ったら、みんなわたしと考えが同じだったので、また驚いた。イタリアやフランスでは男も女も口をそろえて言う。

「夕食のあと、夫がさら洗いするなんて、考えられないわ。絶対

にそんなのいやだ。」

保育園から養老院を訪れたわたしは、また驚いてしまった。最近できたばかりの鉄筋コンクリート10階建てのスマートなビルディングである。一流ホテルのような造りである。エレベーターは、ベッドが二つ楽々入れられるほどの大きさで、老人に多い病弱な人々の住む建物のエレベーターとして、なんと行き届いていることか。自分で生活できない60歳以上の老人はすべて政府の援助によってここでただで（おこづかいさえある。）安楽な生活ができるのだ。各人独立の部屋をもち、夫婦者にはサロンとベッド・ルームから成る二部屋が与えられ、5部屋に一人の割合で、よくトレーニングされた、清潔そのものの看護婦がついている。6階には食堂があるほか、各階にはちょっとした簡単なキッチンがついていて、何か作りたければ料理も自由にでき、また1階には喫茶室・売店などがある。

スウェーデン人は全く老後の心配など何もないのだ。どこの国の老人より物質的に快適な生活が死ぬまでできるのだ。たしかにそれはすばらしいことだ。従来の家族制度がくずれ、晩年のみじめな困窮した老人を持つわたしたちから見れば、理想の社会である。しかしこんなにすごい社会保障というものを見せられると、いったいこ

れが人間にとっていいものなのかどうかを考えてしまう。廊下で行き交うおばあさんやおじいさんが、うつろな灰色のひとみをしているのが、わたしはひどく気になった。あんなにうつろな老人のひとみは今まで見たことがなかった。考えてもわかるだろう。何もしなくて生きているだけの人生とはどんなものか。憎しみも愛もない人間の生活、困窮の苦しきも働く喜びもつらさもないという生活、これでは文学などというものも滅びてしまりにちがいない。

近代的な鉄筋のこのビルディングのピカピカ光る清潔な床や壁、そしてどの部屋にもあるアブストラクトの絵、すべてがボタンで自動的に動く台所やエレベーター、そうした中でただ生を保っている老人たちのために、わたしはせめて額の中の絵だけでも(2)コローや(3)セザンヌのような絵であればと思った。そしてまたひょっとすると、これはわたしが日本人だからかもしれない、機械文明の進んだモダンなスウェーデンでは、老人でもアブストラクトをけっこう楽しむのかもしれないと思い返した。しかし、わたしはどうしてもアブストラクトがこのおばあさんたちに似つかわしくないような気がして、ひとりのおばあさんにきいてみた。

「ああいうアブストラクトの絵がお好きですか？ それとももっ

と自然派の風景や人間のいる絵の方がよろしいのかしら？」

「もちろん、そうですとも。わたしたちにはああいう絵はわかりませんよ。」

案内の婦人が口をはさんだ。

「わたしたちは現在の老人を対象としているより、むしろ何年も何十年も先のことを考えているのです。そのころにはきっと、あのアブストラクトの絵がちょうどよくなるんですね。」

すべてが計画され、物質文明は常に次の段階へとむさぼるように進んで行く。それが20世紀の政治なのだ。そしてそのうちに人間が追いつけなくなってしまうのだ。スウェーデンの段階では、ある意味で物質文明の進展に人間は取り残され始めている。

わたしは帰りの車の中で案内の婦人にきいた。

「これからあなたたちスウェーデンはどこまで行くのでしょうか。」

「全く、それはわたしたちにもわからないんですの。」

と、この婦人までがうつろなひとみで前方を見ているのだった。全世界でスウェーデンのような社会を目ざして人々は建設へ、生活水準上昇へと努力している。インドのジャングルの人々が今のこのスウェーデンの生活水準を獲得したとき、スウェーデンの人々はどん
